

滋賀県文化情報 『えんむすび』

●「第74回滋賀県美術展覧会」 作品募集のお知らせ

滋賀県美術展覧会は、広く県民の皆さんが日頃の創作活動の成果を発表する場、また、身近に芸術を鑑賞する場として毎年開催しています。本年は、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策に十分配慮した方法での実施を予定しています。今だからこそ、精一杯の表現を目指して、多くの力作をご応募ください。



- 応募資格** 滋賀県内に在住または通勤・通学する方（中学生以下は除く）
- 応募部門** 平面（日本画・洋画など）、

立体、工芸（陶芸・染織など）、書の4部門

■**作品搬入**
【平面・立体・工芸・書】2020年10月31日（土）、11月1日（日）

於：滋賀県立文化産業交流会館
【平面・書】11月1日（日）

於：草津市立草津クレアホール
※いずれも10時30分～16時

■**展覧会**
【会期】11月12日（木）～18日（水） ※会期中無休

【会場】滋賀県立文化産業交流会館
（米原市下多良2の137）

■**その他**
公開審査・11月5日（木）11時～
於：滋賀県立文化産業交流会館

※見学者は出品者限定。往復ハガキによる事前申込制。（各部門、定員10名）

審査員による講評会・11月15日（日）
工芸・書10時30分～

平面・立体14時～
※作品の画像で講評会を行います。

※入賞者以外の方は要予約。（11月12日9時より電話受付開始。先着順）

■**募集要項等問合せ先**
（公財）びわ湖芸術文化財団 地域創造部まで
TEL077-523-7146

TEL077-523-7146

●滋賀近美アートのスポットプロジェクト Vol.3「エンドレス・ミトス」展を開催

リニユール



藤野裕美子 《過日の同居（高見島）》
2019 撮影：龜山崇

整備のため現在長期休館中の滋賀県立近代美術館では、2018年度から県内様々な場所でも、滋賀ゆかりの若手作家による新作を中心とした企画展「滋賀近美アートのスポットプロジェクト」を実施しています。第3回となる今年は、東近江市能登川を会場に、小宮太郎、武田梨沙、藤野裕美子の3名が展示をします。皆様のご来場をお待ちしております。

【会期】9月19日（土）～10月18日（日）
10時～17時 会期中無休

【会場】滋賀県東近江市垣見町776
（JR能登川駅東口より徒歩2分）

【主催】滋賀県立近代美術館
協力：株式会社大兼工務店、ファブリカ村

後援：東近江市、東近江市市教育委員会

Made in Shiga 身近に感じる「美」の世界

観音の里の「物語」は終わらない

『星と祭』復刊プロジェクト実行委員会

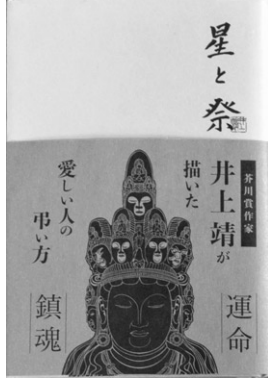
●『星と祭』をふたたび

井上靖の小説『星と祭』は、琵琶湖で娘を亡くした父親が、ヒマラヤでの月見やびわ湖畔での観音めぐりによって心の平安を得ていくという物語。昭和46年5月から1年間、朝日新聞紙上で掲載され、湖北の一面観音が全国的に注目されるようになりました。しかし、書籍化された小説は時の流れとともに絶版状態に。湖北にゆかりのある『星と祭』を自分たちの手で復刊することはできないだろうか。そしてこの本を通じて湖北の観音文化を伝えることはできないだろうか。2018年5月、そんな思いから「星と祭復刊プロジェクト」を立ち上げました。出版資金は観音さまに因み、古来、寺社や仏像の建立、修理の際に用いられた「勧進」スタイルを活用。単に出版をするというのではなく、観音さまやその地域のことも知ってほしいと、小説に登場するお堂で朗読と十一面観音の魅力を紹介するイベントを開催し、賛同の輪を広げまし

県内で実施されている「美の滋賀」づくりに関する取り組みを紹介します。



『星と祭』復刊プロジェクト実行委員会メンバー



復刊した『星と祭』



勧進イベントの様子 (石道寺にて)

た。この取り組みは新聞各紙でも取り上げられ、全国各地から支援金（予約金を含む）を集めることができました。

●観音文化の継承へ

2018年10月20日、地元出版社から『星と祭』を刊行。発売前日は「美の滋賀」プロジェクト推進事業を活用し、びわ湖畔の長浜太閤温泉浜湖月にて「星と祭復刊セレモニー」を開催しました。第1部では佐々木悦也氏（高月観音の里歴史民俗資料館学芸員）と駒澤琛道氏（仏像写真家）による講演会を、第2部では全国の協力者と井上靖のご子息、観音堂の世話方さんたちが集う交流会を開催しました。それはまさに、一冊の本が繋いでくれた出会いの場でもありました。年齢や職業、居住地が異なる人たちが、『星と祭』で描かれた湖北の魅力を語り合い、親睦を深めました。とりわけ、信仰やくらし、風土と深く結び付きながら守られてきた湖北特有の観音文化については、文学、芸術、信仰、民俗といった垣根を越えて様々な意見が交わされ、今後の取り組みに大きな示唆を与えるものとなりました。

私たちの活動のゴールは復刊ではありません。『星と祭』が繋いでくれた絆を大切にしながら、観音文化継承に繋がる地域活動を続けていきたいと考えています。

アートのみかた

— 滋賀県立近代美術館所蔵作品をもとに —



石野光輝 キリンの山 2005 陶土・自然釉

高さ60.0・5×幅42.0×奥行40.1cm

滋賀県立近代美術館蔵

● 覆い尽くすキリン、生き生きと

どっしりとした山状の粘土の表面を多数の突起物が覆い尽くしています。一つ一つの突起物は自由な方向を向いており、まるで今この時も蠢いているかのようです。目を凝らすとくりっとした双眼が所々に見え隠れし、威風堂々とした佇まいのなかにも愛嬌を感じられる作品です。

本作《キリンの山》の作者である石野光輝（1988～）は、滋賀県立近江学園に在籍した2004～07年の間に様々な生物をモチーフとした陶作品を制作しました。石野の作

滋賀県立近代美術館学芸員 星野 志穂

品には手の平大の単体のキリンも存在しますが、ユーモラスにデフォルメされながらも一目見てキリンとわかる当該作品と本作を比較すると、本作における反復された突起物はキリンのたてがみの集合体を表していることが窺えます。

群れをなしたキリンが乾いた大地を駆ける音や、濛々と立ち上る土煙の様子までもが生き生きと伝わってきませんか。キリンたちが目指す山の頂には、一体どのような楽園が広がっているのでしょうか。

オペラ日和

●歌劇《魔笛》を愉しむ

びわ湖ホール 総括プロデューサー 舘脇 昭

新型コロナウイルスの影響がなかなか終息しませんが、7月26日には、沼尻竜典芸術監督指揮でびわ湖ホール声楽アンサンブルの合唱をお届けしました。歌手と1列目のお客様の間を8畳、歌手間は前後左右に3畳ずつという十分な間隔を持たせ、客席は1席ずつ空けた千鳥配置、検温、消毒など万全の感染対策のもとで実施しました。制約こそありますが舞台芸術公演の実施は着実に復活始めています。

こうした中、来年1月には、モーツァルト作曲の不朽の名作オペラ《魔笛》公演を予定しています。この作品はモーツァルトの最後のオペラで、《フィガロの結婚》、《ドン・ジョヴァンニ》、《コジ・ファン・トゥット》、《後宮からの誘拐》のいわゆる五大オペラの一つに数えられ、彼の作品の集大成と位置づけられています。圧倒的な高音域を極めて速い速度で転がるように歌う「夜の女王」役（ソプラノ）のアリア（詠唱）、極めて低い音域が求められる「サラストロ」役（バス）のアリアをはじめ、名曲満載のオペラです。日頃から訓練された声をマイクなしで会場全体に響きわたらせるオペラならではの醍醐味をお楽しみください。

24分間で会場の空気がすべて入れ替わるという劇場の優れた特性を活かしつつ、オーケス

トラピット内の密や歌手同士の密をどのように回避するか等、演出面や運営面で様々な工夫を凝らして上演しますので、安心してお越しください。



オペラへの招待《こうもり》公演（2020年1月）

オペラへの招待

モーツァルト作曲《魔笛》

全2幕（日本語上演・日本語字幕付）

日時	2021年1月28日(木)～31日(日) 4日間とも14:00 開演
会場	びわ湖ホール中ホール
指揮	阪 哲朗
演出	中村敬一
出演	びわ湖ホール声楽アンサンブル 清水徹太郎、山本康寛、 松森 治、片桐直樹、平尾 悠、 溝越美詩 ほか
管弦楽	大阪交響楽団
チケット	5,000円（一般）、 2,000円（青少年） 発売日未定

●豆知識

「声楽アンサンブル」のある劇場

世界的に見てオペラ劇場は、専属のオーケストラ、合唱団、バレエ団などを持ち、日々公演を行っています。また、ドイツ語圏の劇場には合唱団とは別に「声楽アンサンブル」（オペラ公演で準主役から端役まで担うメンバー）が存在します。びわ湖ホールは国内では唯一、その「声楽アンサンブル」を持つ劇場です。ホールがオープンする半年前（1998年3月）に発足。ホールのオペラ公演や演奏会のほか、地域に出かけて行う舞台芸術の普及活動など、様々な形で活動しています。こうした専属アーティストが劇場に常駐していることで、新たな企画を立案することも、緊急に公演を行うにも迅速に進めることができます。現在では、彼らの出演を心待ちにしてください。ファンの方も多く、現役の14名と卒業生を合わせて75名のメンバーが、まさに劇場の原動力となって機能し続けています。